

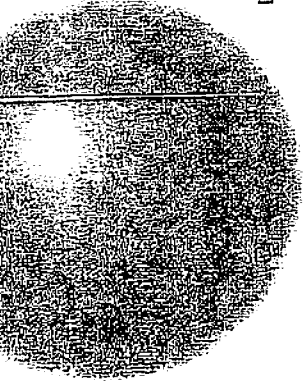
# 談 鼎 春 新



旭川を外から見たらどう見えるのだろう。内にいる旭川人にはわからないものが見えているのではないか。旭川を自慢気に語る旭川人はそう多くない。しかし、本当に旭川には他人に「誇る」ことのできるものは少ないのだろうか。そんな疑問について、北海道上川支庁長の坂口収さんと日本銀行旭川事務所長の尾家啓之さん、旭川大学准教授の江口尚文さんに語っていただいた。

## こんなにもある

## 旭川の素晴らしさと将来性



# 「旭川は誇れる街」と段々実感

—みなさん、出身が旭川以外の方ばかりなので、旭川の第一印象からお聞きします

【坂口】 昨年四月に旭川に赴任し、八カ月になりましたが、赴任した頃は農業、観光、医療、高等教育機関等が集まって、さすが北海道第二の都市と感じました。

反面、人口が三十五万人というのも意外な感じがしました。まちの様子からは、ワクワク、ドキドキするコアがないという印象でした。

【尾家】 私は一年半くらい前に旭川にきました。赴任する前は日本

一元気な動物園のまち、ラーメンのまち、寒暖の差が激しい越冬のまち、という印象が率直なところでした。実際に赴任して、こんな

に良いまちだったのかと実感するところが多々ありました。雄大な大自然、豊かな食文化、大き過ぎず小さ過ぎずといった都市のつくりもそうです。

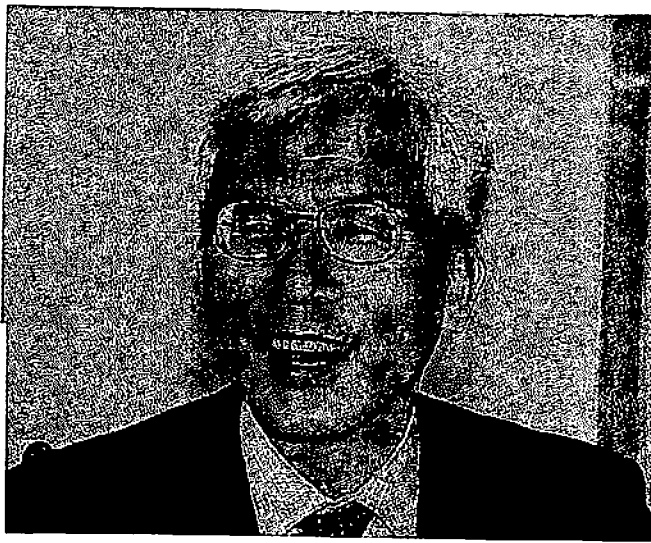
反面、謙虚さなのかも知れませんが、控えめな方が多いような気がします。もう少し、自己主張があってもいいのかなあと思っています。

【江口】 九州から来たので、寒く

て、雪が多くて、さびしいまちだろうなと勝手に想像していました。旭川に最初に来たのが、大学の採用面接があった二月。その時は氷点下八℃でした。今では大した

のではない気温ですが、その時は「おー！」という感じでした。四月に赴任して、買物公園通りを見た時、これはすごいと思いました。その後、旭川と深く交わるようになり、段々と「旭川は誇れるまち」と思うようになりました。

私は経営学をやっていますから、市内の企業がどのような動きをしているか注視して見えますが、どうも仕掛けるのが苦手な企業が多いようです。きちんと仕事をこなす優れた企業は多いのですが、外に向かって何かを仕掛けていく行為が、もう少しあってもいいと感じています。



### 坂口 収 さん

1953年、和歌山県生まれ。東北大学法学部卒後、75年北海道に庁入庁。経済部産業立地推進局長などを経て、08年4月から上川支庁長

旭川人の気質をどのように捉えていますか

坂口 あるいは意味で投機的な帯広などと比べ、旭川は非常に堅実ですね。

江口 かつての稲作は地道にや

っていけば、それなりの収入がありました。畑作は天候や需給の変化で、収入が大きく変わりますから、その辺が影響していると言います。

坂口 「十勝モノロー主義」と言いますが、旭川モノロー主義という言葉はありません。これは、札幌という大きな求心力をもった都会が形成され、その影響が旭川まで及んでいて、帯広はまだその範疇下にはないことと関係していると思います。

尾家 旭川の人は謙虚な方が多いのか、企業家でもリスクテイクをする人が少ないという印象があります。経済の原動力は自分で責任を取り得る範囲で、リスクテイクすることです。ある程度の慎重さを持ちながらも、経営に当たっては伝統のフロンティア精神を發揮してもらいたいと思います。



### 尾家 啓之 さん

1958年、東京都生まれ。早大政経学部政治学科卒後、81年日本銀行に入庁。米国ワシントン勤務等を経て、07年7月から旭川事務所長

旭川の気質を活かした産業のあり方については、いかがお考えですか

坂口 旭川人の気質に合った産業を生み出していくことが必要だと思います。

江口 品質でいったら、メイ・ド・イン・旭川は優れています。全国的にみても高い競争力を持っていると思います。

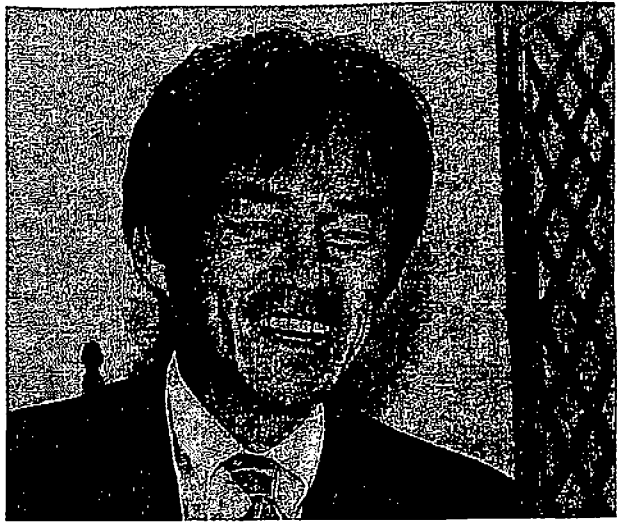
尾家 軍都として発展してきた旭川には、かつて軍人にかかわる伝統業種が多数ありましたが、戦後は基本的には公共工事によって発展した建設業やその関連

# 優秀な人的資源が多い

業種が経済の柱だったと思います。そのため、一部優れた製造業はありますが、全体としてみると、全国対比で製造業など物を生み出す産業が、十分育ってこなかった。今後、特定の業種がまちの経済全体を引っ張っていくという姿は、あまり現実的ではありませんが、ジャンルに関わりなく、どんどんイン・ベイティブにやれる人たちが出てくるようなまちにならないければなりません。既にそのような素地はあると思います。

江口 経済が伸びている時は問題ないのですが、マイナス状況になると、これまでのように仕事をとり合うという発想では、とっついていっていかない。ビジネスモデルを変える必要があります。昔は開拓精神があったのですが、今はそれがなくなってきたような気がします。

尾家 一九八〇年代には日本の輸出産業が、九〇年代から二〇〇〇年代にかけて金融機関が厳しい構造改革を行ってきたが、建設業界はそこまでの改革をしないで済まされた。しかし、北海道にとっては、とても重要な産業です。現在は将来のあるべき形に変わる過渡期だと考えます。



江口 尚文 さん

佐賀県生まれ。1994年、西南学院大学大学院経営学研究科博士課程後期課程終了。97年から旭川大学経済学部准教授

# 人を育てる高い潜在能力

——農業は経済基盤を支える基幹産業になり得ますか

とを理由に、逃げ込んではいないかどうかを検証する必要があります。でしょう。

例えば、京都は伝統のあるまちですが、伝統が革新的かどうかは、常に議論になるところです。しかし、伝統を守るためには革新的なものが必要だと考えられています。旭川の人は内向きと言われますが、内向きがイコール閉鎖的

と、単純に考えることは間違いで、単純に考えることは間違いで、「内向きだが、革新的なもの」は山ほどあります。

旭川でも新しいものを追い求めている企業は、結構強い。一般にリスクテイクと見える行為でも、経営者自身は必ずしもリスクとは思っておらず、確信を持って動いていることがありますね。

旭川には経済を発展させる上で不可欠な要素である優秀な人的資源が豊富にあると思っっています。特に女性の労働力がすごい。

旭川の強みです。医療機関も多く、環境も良く、食べ物もおいしいので、定年退職後の居住地として、旭川に移住しようという人がもっと増えるのではないかと。

地域産業の育成のためには十分な内部留保が確保でき、その上で次の産業が育つ準備を行える、つまり、うまくバトンタッチができる状況になっていかないと、なげばならないと思います。

旭川には十分な歴史と味が定番になったと聞きます。旭川ラーメンは地元産業と密に関連していただけています。

旭川はわりでなく、それは北海道全体に言えることです。農業とそれに付加価値をつける食品加工にもっと力を入れていくことが有益です。

旭川はわりでなく、それは北海道全体に言えることです。農業とそれに付加価値をつける食品加工にもっと力を入れていくことが有益です。

旭川を客観的に見ることが求められていると思います。これが魅力の一つにつながっていると思います。市内には四天王一短大として高専があり、道立の北方建築総合研究所、林産試験場、さらには近郊には農業試験場もあります。人を育てる潜在能力が大変高いわけですから、旭川は人を育てるまちになってほしい。それだけのインフラもありませんから、「場」づくりをしていけば可能性は大いに広がります。

その点、旭川ラーメンは興味深いですね。例えば、合同酒精は馬鈴薯を原料に酒糟を作り、その絞りカスで豚を飼っています。豚肉を取った後に残る骨を活用し、ラーメンのスープがひかれたらいいと思います。また、通菜もあつたから、しょうゆ

旭川には十分な歴史と伝統がありますが、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。

旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。

旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。

旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。

旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。これは旭川には十分な歴史と伝統があり、本州の都市と比べると比較的低いでしょうか。